

2012年 9月23日・しんぶん赤旗「文化」欄では

原発事故後を詩で“予言” 若松丈太郎さん

私の住む南相馬からこの怒りをどう表せば…

「3・11」以前から、原発の危険性を数十年にわたり告発してきた福島県在住の詩人、若松丈太郎さん。予見的な作品がいま、改めて注目されています。若松さんが住む南相馬市を訪ねました。(金子徹記者)

「チョウが草花に羽をやすめている／ハエがおちつきなく動いている／蚊柱が回転している／街路樹の葉が風に身をゆだねている／それなのに／人声のしない都市／人の歩いていない都市／四万五千の人びとがかくれんぼしている都市／鬼の私は捜しまわる」

連詩「かなしみの土地」(2000年刊行の詩集『いくつもの川があって』)の一部。まるで「3・11」後の世界を描いたような内容です。1994年5月、チェルノブイリを訪問し想を得て作りました。エッセーでも、繰り返し原発を取り上げ、注意を喚起してきました。

「私たちは私たちの想像力をかりたてなければならぬ。最悪の事態を自分のこととして許容できるのかどうか、想像力をかりたててみなければならぬ」(「原子力発電所と想像力」94年9月10日)

若松さんの住まいは、福島第1原発から25キロの南相馬市原町区にあります。高校教師を務めながら、この地で暮らして50年。原発への問題提起を続けてきながら、「無力感もあった」といいます。

「詩を読む人は少ないし、周りの人の目に届かないところで書いていると感じていました。ただ、周りの人も原発に無関心ではいられないし、高校の生徒たちも不安を感じていた。ここに住んでいて、原発に無関心ではいられません。見えないけれど何か感じるおそろしさがある。だから、25キロのところでチェルノブイリと同じようなことが起きたらどうなるか、想像しながら詩を書いたのです」

昨年春、詩やエッセーで警告してきた「最悪」の事態が発生。“予言”の的中に、「怒りがますます強くなっている」といいます。

事故でなく「核災」

「私は、『事故』ではなく『核災』と呼んでいます。偶発的な事故ではなく、避けられたはずの災害であり、人災だからです。それなのに、大飯原発は再稼働を始めてしまった…」

野田首相の、早すぎる「収束宣言」にも怒りが収まりません。

「南相馬市の小高地区は、警戒区域の指定が解除され半年たっても1年半前のまま。時間が止まったようです。『復興』なんて全然進んでいない。外部の人は終わったと思っているかもしれないが、『核災』は始まったばかりです。こうした怒りを、言葉でどう表現するか、難しい」

終戦を迎えた時は10歳。「私の原体験は、教科書に墨を塗ったこと」といいます。

「それまで正しいと教えてきたことを、どうしても簡単に否定できるのかと思いました。変節するような生き方はしたくない、そういう思いが原点にあります」

中学時代、本が少なく「読めるものは何でも読みたい」と思っていたころ、自宅で本が詰まったリンゴ箱を見つけました。出征時に叔父が家に預けていったもので、そのなかの詩集に影響を受けました。

「仕事の整理がしたい」といいますが、最近は注目度が上昇し、多忙です。

「のんびり暮らす老人になるつもりが、そうはいかなくなった(笑)。時間の過ぎるのが早くて困っています」

と紹介されています。